

## 子どもの創造性を豊かにする鑑賞方法についての一考察

——「創造的鑑賞」から「続き絵」を描く活動を通して——

三樹 正典

In Consideration of the Method of Appreciation to Enrich the Creativity for Children

——Through the Activity of Drawing “a Continuous Picture” by

Using “Creative Appreciation”——

Masanori MIMASU

### Abstract

This research shall consist of the lesson where young children have actually performed the activity of expressive appreciation in “creative appreciation” at the museum, and where the subject, which is “to draw a continuous picture”, has been assigned to those young children after appreciating the picture at the museum. Also, this research aims at the development of “rich creativity” by the lesson. Two works have been chosen as the subject matter in this research. These works are Vincent VAN GOGH (Le jardin de Daubigny 1890) and Odilon REDON (Les fleurs dans un vase bleu 1905–10).

**Keywords:** creative appreciation, continuation picture

### はじめに

2010年6月、小学生の図画工作の2つの公開研究授業を見る機会があった。1つは、ゴッホの「自画像」の作品を鑑賞した後、絵から感じたことがらを「5／7／5の定型詩」で表現し、伝え合うという2年生の授業。もう1つは、自分の印象に残る絵画を見つけ、そこから受ける印象を「書」に表すという複式高学年の授業であった。授業者から「5／7／5で表現しなさい」「書に表現しなさい」という指示がでたとき、一瞬、「え！小学生に表現できるのだろうか」と思ったが、児童は、とても自然に言葉や書と美術作品を関連づけて鑑賞し、作品の特徴や印象、描かれた人物の性格や心情を短い時間の中で「5／7／5の定型詩」や「書」で表現し、伝え合っていた。以前にも同じような内容の題材を経験していた要因もあるが、いずれにせよ、児童は「5／7／5の定型詩」や「書」といったテーマを手がかりにして美術作品に向き合い、

鑑賞し、作品の印象を自分なりに表現していた。鑑賞から新しいものを創造するという「創造的鑑賞」を示す研究実践であった。これまで2年間、ひろしま美術館と連携し、美術館の本物の作品を「みる」鑑賞活動を通して、色や線を中心に「絵」で表現する研究実践を行ってきたが、「5/7/5の定型詩」や「書」で表現するという「創造的鑑賞」の実践は「5/7/5の定型詩」や「書」、といったテーマが入ることにより、子どもたちの表現の豊かさに広がりやつながりが出来たのではないかと感じた。今回、3年目を迎える美術館での子どもの創造性を豊かにする鑑賞方法として設定した「創造的鑑賞」の実践にとって大きなインパクトとなる研究授業であった。

現行の小学校学習指導要領図画工作科の目標は「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」であり、また幼稚園教育要領や保育所保育指針の表現の目標は「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」である。いずれも「豊かな創造性」が求められている。上記のような「創造的鑑賞」に何らかのテーマを加える創造活動は、子どもの表現により広がりやつながりなどの豊かな創造性を導き出すことができるのではないかと考える。

今回の実践研究は、継続して実践しているひろしま美術館での「創造的鑑賞」の表現鑑賞活動から「続き絵を描く」というテーマを加えた授業を構成し、「豊かな創造性」の育成を目指したものである。

## 1. 続 き 絵

広辞苑によると「続き絵」とは「2枚以上をつづけて一面とした絵」と書かれている。また「続き」という言葉は、「話の続き」「地続き」などつづくことやまた、その部分を意味することでもあるので、そのような絵も含めた絵であり、漫画やアニメーションの2コマや絵本の挿絵も続き絵に属するものとする。絵画の続き絵の表現として最も代表的な作家としてあげられるのが、マチス（Henri Matisse 1869-1954）である。マティスは、初期から自らの制作過程そのものもつ意味に重要な価値をおいていたが、とくに注目すべき点は、制作過程における「同一テーマのヴァリエーション」であると考えられる。マチスは、その制作過程を以下のように述べている。

私は私の色を置きます。それは私の絵の最初の色です。そこに2番目の色彩を加え、そしてこの2番目の色彩が最初の色彩と調和しないように見えたときには、それを取り除く代わりに、そこにこれまでの二つの色に調和する3番目の色彩を加えます。こうして画面に完全な調和を生み出し、私をその絵に取り組ませた感情から自分が解放されたと感じるまで続けなければならなかったのです。

制作過程を制作の行為のみと考えると、マチスに限らず、多くの作家が行っている制作行為であると言えるが、最初に置いた色を一つの「絵」と見なすと、2番目の色彩は、最初の絵の続き絵であり、その続き絵の制作過程の繰り返しを彼は、意識的に自覚的に行っていたのである。その制作過程によって表現されたマチスの過程にある絵画を天野（2004）は以下のように述べている。

自らの制作プロセスを実際の身体的時間的な制作行為そのもののなかで捉え直しているように思える（中略）絵画の制作が単純な反復や外界の従属的な模倣ではなく、固有のプロセスを伴う画家による「創造」であり、画家によって生かれた制作の行為における感覚の表象である

マチスの作品の中で、その制作過程における「同一テーマのヴァリエーション」を表現したものに1943年に発表した「テーマとヴァリエーション」と題するデッサン集と1945年に開催したマール・ブローニエにおけるマティス展覧会が挙げられる。1940年代において、マティスはデッサンが最も彼の表現の中で重要であると強調しているが、「テーマとヴァリエーション」と題するデッサン集（図1）は、その思想や方法を最も表現したもので、同じテーマに対して様々な角度からのデッサンのバリエーションが描かれている。その制作過程を示すことで最終的には一つのテーマとヴァリエーションから作品への展開させる教育的な側面も提示している。

また、マール・ブローニエにおけるマティス展覧会（図2）では、当時の彼の主要作品とその制作過程を写真と共に展示したもので（図3）、テーマと対象との関係の中で展開していく制作行為・制作過程の中から生じていく作家の心理的な「表現」と色と形のバランスによって画面を続き絵のように構成していき、1枚のタブローとしての「表現」を見せている。

続き絵の表現としてもう一人注目すべき画家にホアキン・トレンツ・リャド（J. Torrents Llado 1946-1993）があげられる。彼は、マチスのように制作過程を意識的に作品化していない

## 著作権により画像は閲覧できません

図1 デッサン集「テーマとヴァリエーション」よりシリーズ1 1943年

著作権により画像は閲覧できません

図2 マーグ画廊での展示風景

図3 制作過程の写真

著作権により画像は閲覧できません

図4 ジヴェルニーモネの家 1990

図5 マルバスの入り江 1992

が、一つの画面に具象的表現と抽象的表現を融合させ、その表現の変化が、あたかも続き絵のように感じさせる不思議な世界を表している。鈴木（1993）は、リャドの表現について以下のように述べている。

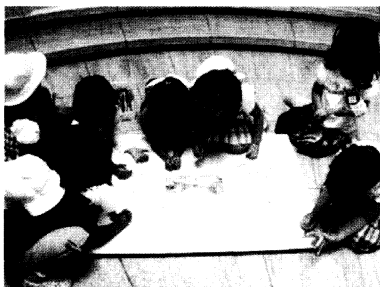
トレンツ・リャドの風景画は、マネやモネに代表される19世紀後半の印象派を思わせる。だが、彼の大胆な画面は、明らかにそれを超越している。光を受け、かすかに揺らぐ水、名もない水辺の草、咲き乱れる花々、そして樹々の影、何とも不思議な静けさ、その中に潜む生命の喜びを、彼の筆は見事

に表現した。画面中央の大胆な枠、周辺部の思い切った抽象化、キャンパスの上に飛び散り踊るような力強いタッチ。彼の作品の前に立った者は思わず息を呑む。

## 2. 「創造的鑑賞」から「続き絵」を描く学習内容

### 1) 「創造的鑑賞」から「続き絵」を描く学習内容

- ① ひろしま美術館の常設展示の平面の作品を担当の先生と一緒に鑑賞する。  
「みる」「感じる」
- ② 展示作品の中でゴッホの作品「ドービニーの庭」とルドンの作品「青い花瓶の花」を鑑賞する「みる」「感じる」
- ③ ゴッホの作品「ドービニーの庭」は「庭」をテーマに、ルドンの作品「青い花瓶の花」は「花」をテーマにそれぞれの絵の続きを色鉛筆を使ってパネルに描く  
「みる」「感じる」～「続きを描く」



- ④ パネルに描いた作品をみんなで鑑賞する。  
「みる」「感じる」～「続きを描く」～「つなげる」

### 2) 授業実施場所・日時・対象園及び学年の園児

実施場所	ひろしま美術館 常設展示室 中央ホール
日 時	2010年6月4日（金）11：00～11：30
対 象 園	聖モニカ幼稚園 年長園児 48名

### 3) 学習のねらい

本学習では、幼稚園教育要領の表現もとに下のようなねらいを設定し、実践した。

美術館の本物の作品（テーマ）から感じたことなどを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする

1. 美術館の実物の作品に興味・関心をもたせ、鑑賞活動を楽しみ・親しむことができるようにする。
2. 美術館の実物作品の色や形の美しさなどに気づくことができるようにする。
3. ひろしま美術館の作品（ゴッホの作品「ドービニーの庭」とルドンの作品「青い花瓶の花」）を見て、その絵の続きを自分なりに描いて楽しむことができるようにする。
4. 鑑賞活動を通して、作品の続きを創造する楽しさを共に深めることができるようにする。

## 3. 事例の考察

### 1) 鑑賞作品

一昨年度は、ひろしま美術館の常設展の78絵画作品を鑑賞作品、昨年度は、立体彫刻作品1点（マイヨールの作品「ビーナス」）、本年度は絵画作品2点【ゴッホの作品「ドービニーの庭」（図7）・ルドンの作品「青い花瓶の花」（図8）】を鑑賞作品として選んだ。子どもたちが実際に見たり、感じたりしたことが具体的にどのように表現され、展開していくのかを見ていくために、描いていく作品を2点に絞って設定した。昨年は、女性像ではあるものの「ビーナス」という生活や身の回りのことがらとはかなり離れた対象であった。描き始めるときも「わからない」とか「難しい」といった声がたくさん出て、鑑賞作品としての題材に課題が残った。保育所保育指針や幼稚園教育要領の教育にかかわるねらいにも「身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする」「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」など、「身近なもの」や「自然などの身近な事象」などとの関わりに重点をおいたことがらが多く、身近な環境に親しませ、自然と触れ合う中で様々な作品を鑑賞させ、より興味や関心を持たせていくことが必要であると考えた。そこで今回は、鑑賞のテーマを「庭」と「花」に設定し、美術館の中の作品だけでなく、美術館の周りの木々や草花にも触れさせる体験も入れながら、イメージや言葉を豊かにさせていく試みを行った。その後、身近な自然の一コマを表現している2点の平面作品（ドービニーの庭・青い花瓶の花）を鑑賞し、その続きを自分なりに考え、自由に展開させて描いていくという学習過程を行った。

## 著作権により画像は閲覧できません

図7 【作品】

作 者：ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ  
(Vincent VAN GOGH 1853-1890)  
作品名：ドービニーの庭 (1890)  
素材・サイズ 油彩 (53.2×103.5cm)

図8 作 者：オディロン・ルドン (Odilon REDON 1840-1916)  
作品名：青い花瓶の花 (1905-10)  
素材・サイズ  
パステル (78.0×53.8 cm)

### 2) 描画材料 (パネル・画材)

#### ・パネル

表現活動 (描画活動) では、共同制作のように、1枚の大きなパネル (103 cm×73 cm) に何人かが集まって、パネルの中央に鑑賞作品の写真を貼り、その作品の続きを描き進めて行く形式をとった。1枚の大きなパネルにみんなで描く過程では、「みんなと一緒だと描けない」「自分の描く場所がない」など、描いていく難しさを感じる子どもたちが出てくる課題が一昨年の実践から考えられるが、個人のパネル単位で続きを描いていくよりも、続きを描いていく過程において、「何を描く」「どのように描く」などの初発的な描画活動の見通しが、お互いの活動を実際に見ながらできることにより、より表現の広がりやつながりが出来やすくなるのではないかと考え、1枚のパネルにみんなで描く形式を取った。パネルは、厚みのあるベニヤ板に紙を貼っている構造なので、幼児でも僅かな力でのびのびと描き続けていくことできるため、今回もパネルに描かせる形をとった。図9～図14は、園児たちがパネルに描いたゴッホ「ドービニーの庭」とルドン「青い花瓶の花」の続き絵である

#### ・画材

描画材は、昨年に引き続き、紙巻き三菱水溶性色鉛筆 (rainbow) を使用した。画用紙は通常の白色画用紙を下地をして使用したため、9色 (き・きみどり・みどり・あか・だいだい・もも・みず・あい・むらさき) の色鉛筆を用意して描かせた。

著作権により画像は閲覧できません

図9

図10

著作権により画像は閲覧できません

図11

図12

著作権により画像は閲覧できません

図13

図14



### 3) 「続き絵」の子どもの表現の展開

色々なものを見て、色々なイメージを想像・発想していく思考過程は、発達段階や生活経験などで多少異なるが、基本的なイメージのプロセスは、年齢によって大きな差はないと考えている。しかしながら、幼児期や児童期（低学年）における鑑賞教材は、「身の回りのもの」「自然のもの」「友達の作品」などが挙げられているが、美術館などで見られる「名画」の鑑賞も幼児期や児童期においても大切な鑑賞教材と考えられる。今回の実践は、その「名画」から感じたイメージをそっくりそのまま写すという模写の表現方法だけでなく、作品の続きを描いていく表現方法も取り入れた表現活動を行った。ゴッホのドービニーの庭では、自分なりに絵から感じた建物を表現したり（図15・16）、庭から畑をイメージし、なすび畑を描いたり（図17）、庭から続く道を描いたりした作品も見られた。

## 著作権により画像は閲覧できません

図15

図16

図17

また、庭からルドンの青い花瓶の花からは、花のイメージを自分なりに展開させ、花瓶と組み合わせたり（図18・19）、花瓶そのものを自分流に描いている作品（図20）も見られた。

## 著作権により画像は閲覧できません

図18

図19

図20

また、描いている内容も園児たちがパネルに描いた（ドービニーの庭）（青い花瓶の花）の続き絵（図9～14）からも見られるように、テーマに沿った内容がほとんどで、園児の自由描

画に特徴的に見られるキャラクターの絵などはほとんど見られず、作家と描いているテーマや描き方にしっかり触れ、その鑑賞過程を通して自分なりに展開して表現している様子が全体の描画内容を見ても伺える。

#### 4) 園児の様子と変化

美術館での行動は、各クラス単位で行い、それぞれ担任の先生が中心となって引率し、園児に関わっていただいた。常設展示作品を見ている様子、「続き絵」をパネルに描いている様子、また、その後園に戻ってから行った表現活動などから今回の活動を通して変化した様子などを各担任の先生に書いていただいた。幼稚園で事前にひろしま美術館の常設展の図録をもとに、絵を見ながらお話をする時間を担任の先生と過ごしていただいていた。そのためか、美術館に展示している絵については、多くの園児が覚えていて、とても親しみをもって絵とお話をしていたのが印象的であった。

##### ①常設展示作品を見ている様子

- ・事前に図録で見た絵を実際に美術館で見たとき、子どもたちは「色がきれい」「やっぱり絵の具だったんじゃない」「大人が描いたんよね?」「ピカソよね!」と表情豊かに話してくれた。
- ・積極的に「先生これ何て書いてあるの?読んで!」と作品の紹介文を知ろうとしたり、どんな方法でどんな画材を使って描いたのかを想像しながら絵を見たりして、1点ずつ見ていた。
- ・「ゴッホの絵が見た〜い!」という子どもがいて、作品を見つけた時には、「こんなに大きかったんじゃない」「きれい」「〇〇さんのお母さんが好きなんよ」と嬉しそうだった。
- ・様々な画家の絵を見て感じたままの素直な思いを口にしていた。「何か、顔がいっぱいあるみたい!」「人がすごいいっぱいおるよ!」「ぐちゃぐちゃに描いとるみたい」「屋根の上に人がおるよ」など。すぐに通り過ぎてしまう絵もあれば、「これは何しとるんかねえ」と興味をもってじっと見つめている絵もあり、それぞれの感性で楽しんでいる姿が見受けられた。

##### ②ゴッホとルドンの絵の「続き絵」を描いている様子

- ・2つの作品を見ると「さっき見た」「〇〇ちゃんが言っていたゴッホの絵じゃ!」など、しっかり覚えていた子どもが多かった。
- ・『続きを描こう』という初めての活動だったが、子どもたちは「早く描きたい!」「もう1回絵を見に行ってから描いてもいいんよね?!」「お花が好きだから絶対お花の続き

を描く」と意欲的だった。

- ・「混ぜたら虹色みたいになったよ」と5～6本の色鉛筆を握って描いたり、ゴッホの庭の続きを描く子どもは、ゴッホと同じ色になるように丁寧に描いたり、長い道を描き加えたり、自分を加えたりなど、一人ひとりの子どもたちが続き絵から想像力をいっぱい働かせ、描いていた。
- ・2点の絵を見て同じように描こうとしている子どもや、その絵の続きを描こうとしている子どもなど様々だった。ゴッホの絵の続きになすび畑を描いている子どもや、たくさん色鉛筆を一度に持って虹を描いている子どもの姿もあった。

### ③その後園に戻ってからの様子・家に帰ってからの様子

- ・園に戻って、数人の子どもたちから「お弁当食べたなら、また描きたい!」とお願いされたので午後から大きな模造紙を渡すと「やった～!」と自分のクレパスを持ってきて数人で集まって「続き絵お絵かき第2弾」が始まった。
- ・先日、クラス懇談会で保護者から『先日書店へ行き、「ゴッホの絵教えてあげる」と美術の本のコーナーに行き、「これー!」とドービニーの絵を見つけ、「これ買って」と言われた』という話を聞いた。

## 5. ま と め

子どもの「創造性」をより豊かにしていくことができるかということを明らかにするために、ひろしま美術館内の植物～常設展示作品～ゴッホ・ルドンの作品2点の鑑賞活動から色鉛筆で「続き絵」の表現活動へと向かわさせる授業実践を行った。園児が美術館の作品を鑑賞しているときの様子、2点の絵の続きを描いているときの様子やその後の幼稚園や家に帰った後の様子、美術館で描いたパネル作品をもとに考察すると、今回の授業実践は、子どもの「創造性」を広げたり、深めさせることができたのではないかと考えられる。その主な成果として以下の2点挙げられる。

1. 美術館の植物や美術館の本物の作品を見ることを通して、より作者や作品を身近に感じ、創造過程や表現技法に触れることができた。

多くの園児は、本物の絵を見て、描くということは、ほとんど経験したことがない。しかし、ポケモンやドラエモンなど、色々なキャラクターを絵や画像を見て、そっくり描こうとした経験のある園児は多いし、キャラクターを描くことを好む園児も多い。キャラクターを描く表現活動は、発達段階から見ても、決して好ましくないとは言えない。しかし、子どもの「創造性」の視点から見ると、少々疑問に感じる。そこで今回の実践では、テーマに沿った2点の絵

を選び、表現活動へと向かわせた。本物の絵を鑑賞することは、「こんなに大きかったんだね」「色がきれい」など、写真や図録で見るとよりリアル感があり、「絵の具で描いたんかね」など絵のテーマからその表現方法や「あのゴッホの絵だ！」など、作家を身近に感じたりして、より幅広く、深く絵を見ることができていた。本物を見て、その「続き絵」を描くという活動は、より子どもたちの鑑賞・表現活動に対する意欲を高めさせ、イメージや「創造性」も豊かにしていったのではないかなと思える。

2. 1つのテーマを取り入れ、その続きを描くことによって、見て描くという表現から自分なりの表現へと展開することができた。

昨年美術館での表現活動は、見た作品を「模写」する活動が中心であったが、今回の表現活動は、模写する活動に「続き絵」を描くという表現活動を加えて実施した。模写もある意味鑑賞した絵の続き絵でもあるが、鑑賞した「絵」そのものに対して描く「続き絵」は、ほとんど経験したことがない活動である。実際に描いた内容(図9~14)をみると、「庭」「建物」「花」「花瓶」など約90%が、テーマに沿ったことがらを中心として描かれ、2点の作品をじっくり見て描いている姿勢がうかがわれた。また「建物」や「庭」では、縦長に家の形を変化させたり、庭に続く道をつなげたり、庭になすびの畑を描いたり、また「花瓶」や「花」では花瓶や花の形を変えたり、特に色にこだわって虹色の花瓶を描いたりして、それぞれのテーマを取り入れつつ、自分なりの表現方法へと展開させていた。そして、その後の園児の「やった！また描きたい」や「ゴッホの絵教えてあげる」などの様子からみても、今回経験した自分なりの表現活動が、次の「創造性」へとつながっていったのではないかなと思われる。

しかしながら、「続き絵」の活動で、みんながどんどん描いている中、「ぼく、下手だから」「上手に描けないかもしれないから、やめとく」「見ておくだけがいい」などとやりたくない自信のない、姿が何人か見られた。和久(2009)は、やりたくない子どもとその創造性についてを以下のように述べている。

やりたいことをやっているときに人間は創造的になります。「もっとこうしてみよう」「もっとああしてみよう」と想像力が働くからです。やりたくないときには想像力も創造性も発揮されません。「早くやめよう」「楽をしたい」ということしか考えないようになります。さらに言えば、創造力を開発するためには、自発的にものごとに取り組む意思を育てることが大切です。

今回の美術館での実践では、「続き絵」と通して、子どもたちの創造性を豊かにしていくことを目的としていた。ある一定の成果は得られたものの、和久の述べる「自発的にものごとに取り組む意思」に関しては、子どもたちに少なからずとも、上手下手の苦手意識を感じさせたりした点から見て、題材やその展開に課題があったのではないかなと考えられる。和久は、「創

造性」を開発するための自発性について以下のように述べている。

自発性は自主性を育てます。自主性は主体性の確立に向かわせます。主体性ができてはじめて人間は自立します。自発性は一語文が出はじめるとすぐ「自分で！」と言いはじめるあれです。どんな子でも自発性のない子はいません。人間は自分で自由を獲得したいのです。

今後は、和久の述べる「自発性」「自主性」の視点を鑑賞題材や表現方法に取り入れ、創造的鑑賞から「続き絵」の表現活動の実践研究を通して、より「豊かな創造性」につながる鑑賞方法を導き出したいと考える。

### 引用・参考文献

- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』, 2008. 日本文教出版. pp. 6-8  
 文部科学省 『幼稚園学習指導要領解説書』, 2008. フレーベル館. pp. 158-159  
 厚生労働省 『保育所保育指針解説書』, フレーベル館, 2008. pp. 80-103  
 広島大学附属東雲小学校 『今, 改めて授業を問う—授業力を高めるには—』, 2010. pp. 81-91  
 マティス 『画家のノート』, みすず書房, 2004. p. 81  
 ジョン・ラッセル 『マティス1869-1954』, タイムライフブックス. pp. 130-137  
 天野知香 「過程にある絵画」, 『マティス展』, 読売新聞東京本社, 2004. pp. 17-20  
 鈴木洋樹 「J. トレンツ・リャドとの出会い」, 『J. トレンツ・リャド』, ガレリア・プロバ, 1993. p. 108  
 小澤基弘 『絵画の制作 自己発見の旅』, 花伝社, 2001. pp. 109-122  
 収蔵品図録—西洋編 『ひろしま美術館』, 1994. ゴッホ「ドービニーの庭」 pp. 64-65 ルドン「青い花瓶の花」 pp. 80-81  
 和久洋三 『子どもの目が輝くとき』, 玉川大学出版部, 2009. pp. 123-124